

(第93回) 歌舞伎「三月大歌舞伎」

3月13日歌舞伎座「夜の部」

今年の歌舞伎界には正月早々Big Newsが松竹より発表されました。それに拠ると市川海老蔵さん(41歳)が来年5月に、13代市川團十郎白猿を襲名、5月以降全国各地で襲名披露が行われる予定です。この團十郎と云う名は江戸時代より続いており、更に白猿の称号は海老蔵さんを含め僅か3名しかおりません。

同時に海老蔵さんの長男勸玄君(5歳)も市川新之助(海老蔵さんの前名)を襲名する事も併せ発表されました。海老蔵さんと云えば2017年に妻(麻央さん)を病で亡くし、今は一男/一女をシングルパパとして育てている事でも知られております。

扱て、今回の演目は下記3題です。

1. 盛綱陣屋(近江源氏先陣館)
2. 雷船頭
3. 弁天娘女男白浪

最初の演目盛綱陣屋は18世紀後半、浄瑠璃“近江源氏先陣館”の全9段の内の8段目として名作の名を馳せている演目。徳川家康が大阪豊臣秀頼(大阪城にて自刃)を攻めた時の設定となっており、ストーリーとしては平家を滅ぼした源頼朝の実子(実朝)と側室の子である頼家の権力争いに近江の名家佐々木一族の盛綱(兄)と弟である高綱が巻き込まれると云うものです。此の演目では中村勘太郎と寺嶋真秀(マホロ)と云う二人の子役が出演しておりますが、どちらも冒頭に述べた市川勸玄君と共に歌舞伎界の名子役と云えましょう。

又盛綱の母微妙(ミミョウ)役は歌舞伎の老女形の中



でも三婆の一つと云われる大役ですが、片岡秀太郎(松嶋屋)が見事に演じております。元題が浪花の事もあり、至る場面で浄瑠璃の語りが入り悲劇的な題材であるこの演目を見事に補佐しておりました。

2番目の演目雷船頭ですが、之は江戸時代の大川端

(隅田川)を舞台として女船頭(市川猿之助)と雷(市川弘太郎)を中心に演じられた作で全編を流れる常磐津の音曲と随所に演じられる踊りが江戸時代の庶民生活を見事に具現している名作です。特に“折から夕立稲光り”の場面では、一般的には怖ろしい容貌の雷公が飄逸な様子を見せる場面と“そもやお前と馴初めは”の踊りの場面では女船頭が雷公を口説くと)云う面白い設定がなされています。全般的に1番目の演目(盛綱陣屋)が歴史上の人物を題材として悲劇的な幕切れを見た後と云う事もあり、常磐津の三味線に乗った明るい江戸情緒を描き切った演目と云えましょう。

本日最後の演目は我々幼少時より講談等でお馴染みの弁天小僧菊之助と白浪5人男を中心とした、痛快なお芝居で本題は“浜松屋店先“と”稲瀬川勢揃い“ですが外題として”弁天娘女男白浪“が上演されております。

第1幕では松本幸四郎扮する弁天小僧菊之助が武家娘を装い呉服屋で万引きの疑いをかけられると云う一連の件(くだり)を呉服屋の番頭、手代達の掛け合いに乗せて語られるテンポの速い劇が続きます。続く第2



幕では白浪5人男の統領扮する松本白鸚以下弁天小僧、亀鶴笑也等が勢揃いし舞台である鎌倉雪の下から逃走を試みるが最後は大

勢の捕り方に囲まれ覚悟を決めて立ち向かうと云う終局を迎えます。

尚弁天小僧菊之助が呉服屋で女装を見破られると“知らざあ言って聞かせやしょう“で始まる有名な台詞廻しは七五調の波に乗り痛快な言葉として広く知られております。又花道の上で5人男全員が紫を基調とした着物を纏いそれぞれが啖呵を切る場面は文字通り圧巻で歌舞伎の醍醐味を味わう事が出来たと思います。今回の第93回歌舞伎観劇の参加者は、夜の部29名、昼の部22名でした。

(相田 實・記)